



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住  
 ■京都大学農学部林学科卒業  
 ■元朝日放送アナウンサー  
 ■元池田マルチメディア代表取締役  
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中

むか「局アナ」いま「隠居」

優先座席



先日、阪急電車で京都へ行く途中、生まれて初めて席を譲って頂きました。

白髪の82歳、どう見ても私は老人ですが、こうして原稿を書いている今の私は極めて達者で、まあ強いて言えば、血糖値が少々高い程度の老人です。

それでも電車に乗ったら「坐りたい」と願いますよ。

しかし、もの欲しそうにキョロキョロ 眼を泳がせ、空席を探したりはしません。「坐れそうにないぞ」と見切ったら、さっさと吊り輪に掴まって悠然？と本を読むことにしています。

見栄っ張りな私ですから、少しでも派手めの服装で背筋を伸ばす程度の体力と、自己顕示欲は微かに残っているのでしょうか。立ったまま読書の30分はシンドイです。

気晴らしに何かしないとやっつけられません。とりあえず、本から目を離して、乗客のアラ探しをすることにしています。

そんなところを 第三者が見たら 変な爺イダと思う

でしようし、観察している相手と目が合ったりすると具合が悪い。

しかし、吊り輪を握って真上から至近距離で他人の頭部や顔をジロジロ見ても相手と目が合う心配は先ずありません。

車窓から差し込んでくる直射日光が頭頂部を照らし、オッサンのカツラと地毛の境界線がクッキリ見えたり、お洒落な娘さんのふんわりセットされた髪の毛の奥がフケだらけになっていたり、目をつぶっている厚化粧のお姐ちゃんのアイラインが、途切れ途切れ、ムラムラになっていたり…と、「意地悪爺さん」を楽しめるのです。

\*

その日の車内は混雑していて、空席どころか 吊革に掴まるのが やつとでした。

たまたま優先座席の前に立ってしまったのですが、誰も席を譲ってくれません。

坐りたい気持ちを抑えて背筋を伸ばし、本を読んでいたとき、その優先座席に坐っていた中年夫婦の声が微かに聞こえてきました。

日本語ではありません。大きな スーツケースを携えているところを見ると、あの「爆買い」で名を馳せた中国人の夫婦が京都見物に行く途中のようでした。

人品骨柄はイマイチだし、地味で冴えない身なりだし、背丈も私より かなり低い。(成金にしても それ程の大金持ちじゃないな)

そんな気がしてジロジロ観察していたら、ご亭主と目が合ってしまった。



慌てて視線を逸らそうとしたとき、彼はニコリともせずに黙って席を譲ってくれたのです。

(エエ奴やないか)

心のなかで呟いた私は、愛想笑いしながら、「シェー シェー」

原語で 礼を言ってから坐りました。

中国人ですから、漢字の「優先座席」は読めたに違いありません。

私を年寄りとして認め、席を譲ってくれた初めての人物が中国人だったというささやかな因縁話を長々と書き連ねてしまいましたが、二〇〇八年に 開催された北京オリンピックの直前、当局から市民に対して、「乗り物に乗ったり切符を買ったりするときは一列に並ぶように」

こんな お触れが出た：という彼の国に対する私の偏見が少し揺らいだような気がしました。

\*

席を譲ってくれたのに、「いや結構です」

「すぐ次で降りますから」とか何とかおっしゃってせつかくの好意を受けない老人や子連れのお母さんを見かけることが たびたびありました。

譲ったほうは気まずくて身の置き所なく、向こうへ行ってしまうたりします。

「有難うございます」 お礼を言って、一駅でも

座れば、周りの人も気分がいいと思うのですがねえ。

子連れの若いお母さんは、見知らぬ人のご好意は遠慮するのが美德と思っ  
ているのか、または言い寄られた  
とでも思い過ごしているの  
でしょうか。

一方、お年寄りの場合は、「私や席を譲られるほどの  
老いばれじゃあない」  
自分ではそう思っても、  
他人が見ればねえ…。

\*

カツラ被らず、髪染めず、  
美容整形もやってない私が  
自分の写真や、鏡を前に、  
「誰が見ても僕は老人じゃ」  
と確信するようになって  
以来、なるべく優先座席に  
座るようにしています。

若い人が遠慮して空席に  
なっている優先座席に私が  
座らないと、元気な連中の  
席が一つ減る勘定になる…  
これは考え過ぎですかね。

10年ほど前のことですが、  
「私や、優先座席には絶対  
座りませんツ」

とおっしゃる当時70歳の  
ご婦人と東京都内の電車で  
一緒したことがあります。

一部上場企業の社長夫人  
だった彼女は、私と同年配  
ですから、あのころは私も  
70台前半でした。

どうして彼女はそんなに  
キツパリと優先座席を拒否  
したのでしょうか。

「原稿を書く参考のために  
あんな発言をされた当時の  
ご存念をお聞かせ下さい」  
とメールで訊ねたところ、

こんな返信が届きました。  
『電車やバスに乗ったとき、  
ガツガツと優先座席に突進  
するのが死ぬほど嫌でした。  
(フムフム我輩と一緒やな)』

周りの同年配の女性達は、  
「75歳からが老人だ」という  
点で意見が一致しています。  
これは最近80歳になって  
分かってきたことです。

多分、上田さんと都内を  
ご一緒したとき、75歳には  
なつてなかつたと思います。  
ですから、まだ老人だと  
いう自覚は全くなく。

「優先座席には座らないし、  
近くにも行かない!!」  
という気分だったのです。

75歳を過ぎて、掃除機が  
重く感じ、エレベーターや  
エスカレーターにやたら

乗るようになりまして。

忘れ物は以前からですが、  
探し物は、年がら年中です。  
それ以外は、どうという  
こともなく、元気で過ごし、  
人にはエネルギーとか  
パワフルだと言われて…。

でも80歳はやはり老人枠に  
突入です。今となつては、  
『私や優先座席に座らない  
主義だ』と言い切った事を  
撤回します。ゴメンナサイ。  
自分が元気なればこそその  
発言でしたな』

いやはや全く同感でした。  
私が意識して優先座席に  
座るようになったのも75歳  
過ぎてからのことです。  
それにしても、

「ゴメンナサイ撤回します」  
なんて謝られると何だか、  
恐縮してしまいました。

\*

「優先座席」で思い出すのは、  
昔、サンデー毎日に載った  
心に残る短編です。

記憶を辿つて再現すると、  
概ね 次のような話でした。

『田舎のバスは満員だった。  
うつむき加減に坐る若者の  
真ん前に老婆が立っている。  
周囲の誰もが、

「席を譲って貰えるだろう」

「譲ってやるに違いない」  
「席を譲ってやって欲しい」  
「あいつ、狸寝入りかな」  
同じ思いで、それとなく  
若者に注目が集まっていた。



たまりかねたのだらう、  
中年の男が口を開いた。  
「おい、目の前にご老人が  
立っているじゃあないか。  
席を替わつたらどうかね」

恰幅のいいガラガラ声の  
男は、襟に菊の花みたいな  
金バッジをつけているので、  
地方議員か中小企業の社長  
といったところだらうか。

満座の中で、糾弾された  
若者は顔を強ばらせたまま  
身動き一つしない。

老婆も居心地が悪そうだ。  
坐っている他の乗客も、  
今さら、当てつけがましく  
席を譲るのも具合が悪い。

そうこうしているうちに

老婆はバスを降りたのだが、  
皮肉なことに老婆が去ると  
車内に空席が目立ってきた。

中年の男は、何の屈託も  
なく、空いた席に、どつかと  
腰をおろす。

目的の停留所に近付いた  
のだらうか、中年の男は、  
立ち上がって、若者の前に  
歩み寄り、忌々しげに、  
「近頃の若者はなつとらん」  
と毒づいてから、バスを  
降りて行った。

終点まで、坐つたままの  
若者が、バスを降りるとき、  
足を引きずりながら、肩を  
左右に揺すっている。

彼は、足に障害を抱えて  
いたのだ。

終点まで乗った客は殆ど  
いなかったため彼の障害に  
気付いた人は少なかった』

\*

途中でバスを降りた多く  
の乗客は、

「目の前に、老人が立ってい  
るのに若造がのうのうと  
坐つて席を譲ろうとしない。

今の若者は、なつとらん」  
憤りながら家路を急いだ  
のではないのでしょうか。